

聖書：ローマ 9：24～33

説教題：神の主権と信仰による義

日時：2016年1月31日（朝拝）

パウロは9～11章で「ユダヤ人の不信仰」という問題を扱っています。旧約時代から神の民として様々な特権を与えられ、導かれて来た彼らが、いざ救い主が送られると、この方を拒絶しました。その結果、彼らの多くはキリスト教会に連なっていない。これではこれまでの歴史は全部無駄になってしまったのか。イスラエルへの神の約束は無効になったのか。ユダヤ人はこの結果、救われないのか。またこれは神は真実でないことを意味するのではないか。こういった問いに対してパウロが答えて来たことは「イスラエルから出る者がみなイスラエルなのではない」ということでした。旧約の歴史を振り返っても、イスラエルから生まれた者がみなまことのイスラエルとしては取り扱われていません。アブラハムの息子たちの間にも真のイスラエルとそうでない者がいました。その息子イサクの子どもたちの間にも真のイスラエルとそうでない者がいました。そのイスラエルの中のイスラエル、霊的なイスラエルにこそ、神の約束は与えられて来たのです。そして誰がその霊的なイスラエルであるかは、ただ神の選びによるということでした。

とすると次に出て来る問いは、神がそのようにある者を選び、ある者を選ばないのは不正ではないかということでした。これに対してもパウロは、絶対にそんなことはありませんと言いました。すべての人は罪人であり、仮に全員救われなくてもそこに不正は何もありません。本来は皆が自分の罪のために滅びて当然です。ですから私たちは救われない人がいることに驚くべきなのではなく、逆に救われる者たちがいることに驚くべきなのです。それはただ神のあわれみによることなのです。

今日はそのあわれみの器として、神は異邦人の中からも救われる者を起こしたという話から始まります。そのことが旧約聖書のホセア書に言われていました。25～26節：「それは、ホセアの書でも言うておられるとおりです。『わたしは、わが民でないものをわが民と呼び、愛さなかった者を愛する者と呼ぶ。『あなたがたは、わたしの民ではない』と、わたしが言ったその場所で、彼らは、生ける神の子どもと呼ばれる。』」このホセア書の言葉はもともとはイスラエルに対して言われた言

葉でした。まことの神から心が離れ、偶像礼拝を行っていた背信状態のイスラエルに預言者ホセアが遣わされ、神は何と彼に生まれた子どもに「わが民ではない」という意味のロ・アミという名を、また別の子どもには「愛されない者」という意味のロ・ルハマという名をつけるように命じます。一体何という名をつけさせたことかと思いますが、そこには目的がありました。神はご自身の一方的な愛によって、「わが民でない者」を「わが民」とし、「愛さなかった者」を「愛する者」としてくださることを、そのことによって現わそうとされたのです。これは直接的にはイスラエルに語られた言葉ですが、それはやがて異邦人をも神はそうされることを予め語っていたものだったとパウロは言っています。すなわちもともと神の民でなく、また神の特別な愛の中にはなかった異邦人たちを、神は「わが民」とし、また「愛する者」としてくださるということです。

イスラエルの選びも同じです。27～29 節にイザヤの預言が引用されています。ここでも、イスラエルの全員が救われるわけではないことが前々から言われていました。イスラエルの子どもたちの数は海べの砂のようであっても、救われるのは「残された者」である。ですからこの手紙が書かれた当時、ユダヤ人の多くが救いにあずかっていないように見えても、何らおかしいことは起きていなかったのです。28 節に示されているように、神の御言葉は着実に、また確実に成し遂げられていたのです。29 節も同じです。そこに「もし万軍の主が、私たちに子孫を残されなかったら、私たちはソドムのようになり、ゴモラと同じものとされたであろう。」とあります。これは主のあわれみがなければ、イスラエルもソドムやゴモラと同じさばきを受けていたということです。本来はそれが彼らにふさわしい報いであった。しかし神はあわれみによって、そこにまことの子孫、霊的なイスラエルを残してくださった。だから彼らが救われたのも、ただ神のあわれみゆえなのです。神は彼らの中からもあわれみの器を選び、召してくださったのです。

さて、こう述べた上で 30 節から新しいことが語られます。パウロは「では、どうということになりますか。」と言います。パウロが問題にしていることは、義を追い求めなかった異邦人が義を得ているのに、ユダヤ人はそうになっていないということ。普通に考えれば、長年、神の導きの下で律法を通して教育されて来た彼らこそ本当の義を手にして、たくさんの方が救いの祝福に入っていて当然なのに、実際は

その数が大変少ない。そして逆に今まで神と関係がなかったような、祝福の外にいたはずの異邦人がたくさん救われている。これはどう説明されることなのか。これまでパウロが語って来たことから言えば、それは一言で「神の御心による」ということになるでしょう。9章16節に「事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」とありました。ですからイスラエル人が色々な特権を受けながらも、結局神の救いに入っていないのは、神がそう意志されたからとなるでしょう。ところがこの9章30節からの部分でパウロはそうは言っていない。この後、しばらく語られて行くことは、これはイスラエルの不信仰によるということです。すなわちイスラエル自身に責任があるということです。注目すべきは、これまで救いにおける神の主権が強調されて来ましたが、ここからは人間の責任もまたしっかり語られていくということです。聖書はしばしば重要な箇所、このように神の主権と人間の責任を並べています。ですから私たちはすべては神の主権にかかっていると言うあまり、まるで人間のすることには意味がないかのように考えることはできないのです。私たちは自分の責任を軽く考えて、何かがあると、特に自分にとって都合の悪いことがあると、それを神のせいにするのは正しくないのです。聖書は神の主権と人間の責任の両方を述べています。仮に私たちの頭にこの関係がうまく整理できなくても、私たちは聖書が述べていることをその通りに受け止めて自分に正しく当てはめる必要があるのです。

ではイスラエルの問題は何でしょうか。それは32節にあるように、義を「信仰によって追い求めることをしないで、行ないによるかのように追い求めた」ことでした。すなわち良い行ないを積み重ねることによって、神の前での義を、救いを勝ち取ろうとした。しかしそのような道を進んでは義を獲得することはできません。このことはすでにこの手紙で見て来ました。3章9節：「ユダヤ人も、ギリシヤ人も、すべての人が罪の下にある」。10節：「義人はいない。ひとりもない。」 20節：「なぜなら、律法を行なうことによって、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」 たとえ人間同士で比較して、それがどんなに立派な行ないであっても、聖なる神の前では少しも称賛に値するものにはならない。イザヤ書64章6節：「私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。」 ですからこのような道を進むことによって、決して神の前に義と認められる状態にはたどり着か

ないのです。

神はそのような自力では決して義に到達できない私たちのために別の道を用意してくださいました。すなわちイエス・キリストに信頼し、この方によって義を得る道です。キリストは人となって地上に来られて、人間として完全に清い生涯を歩まれました。そして律法にかなう 100 点満点の義を獲得されました。また私たちの犯した罪が清算されるために、私たちの代わりに十字架にかかって、本来は私たちが支払わなければならない罪の値を、そのいのちをかけて払い切ってくださいました。この方により頼む信仰を通して、律法が要求する義を得る道を神は備えてくださったのです。

しかしこのキリストは 32 節で「つまずきの石」と言われています。私たちはともするとこの方につまずきがちなのです。なぜならこの神の方法は私たちのプライドとぶつかるからです。私たちは自分の努力によって、自分の功績によって、自分の精進によって、自分の胸を張って救われる道を進みたい。なのになぜあんな人により頼まなくてはダメなのか。あの十字架にかかって死んだ人を私の救い主と言って拝み、頭を垂れ、礼拝するのは恥ずかしい。そういう思いに邪魔されて、私たちはこのキリストにつまずき、神が下さったキリストを拒絶してしまいやすいのです。

しかしもし私たちが自分の行ないによって救いを勝ち取ることができるなら、キリストの十字架は不要なものになってしまいます。イエス様の十字架はキリスト教の中心です。神が私たちのためにして下さったクライマックスの出来事です。それが私たち人間にはそれほど必要ないものであったということなどあり得るでしょうか。イエス様があれだけ苦しみ、ご自分の尊いいのちを大きな叫びと涙をもってささげてくださいなのに、それは無駄な犠牲であったということなどあり得るでしょうか。それは何と恐ろしい話でしょう。しかし神がキリストを送って十字架にまでつけられたのは、私たちが自分で自分を救うことができないからに他なりません。だから神はただこの方により頼むことを通して私たちが義を得、救われる道を用意してくださいましたのです。しかしユダヤ人はこのつまずきの石につまずいたのです。そしてこの方を退け、行ないによるかのようにして義を追い求めたために、いつまで経ってもそれを得ることができず、自らを神の祝福の外に置くことになった

のです。

果たして私たちはこの神が置かれた石に対して、どういう態度を取る者でしょう。33 節で引用されている言葉は、実は二つの聖句を組み合わせたものです。前半は信じない者にもたらされる否定的な側面についてで、イザヤ書 8 章 14 節からの引用です。後半は信じる者にもたらされる肯定的な側面についてで、イザヤ書 28 章 16 節からの引用です。私たちは前半のように、この石につまずく者でしょうか。それに蹴躓いて、転んで、救いを得られなくなる者でしょうか。それとも後半のようにこの石に信頼する者でしょうか。その人は「失望させられることがない」と言われています。その人は必ず神が定めた救いにあずかる者とされるのです。

私たちはどっちの道を行く者でしょう。聖書は、救いはただ神の一方向的な選びとあわれみによると語るとともに、そこに私たちの責任もあると述べています。神は絶対的な主権者であり、すべてのことを御心のままに導かれるからと言って、私たちのすることには意味がないと言わず、むしろ私たちには自分の将来の運命に関する大きな責任があると言っています。私たちはこの両方を受け止めたいと思います。神が主権者であることを仰ぎつつ、私たちのなすべきことをしっかり行なって行きたい。神は私たちが義に達するための唯一の道としてイエス・キリストを遣わして下さいました。私たちは自分の行ないによってではなく、ただこの方への信仰によって完全な義を頂くことができるのです。私たちはプライドに邪魔されて間違った道を行くことなく、神が据えたこの救いの岩に信頼して、決して失望させられない歩みを導かれたいと思います。その歩みの中で、私たちはこの歩みがただ神から出たことを知る者となり、またあわれみの器として選ばれた私はこれからも最後まで神の恵みによって支えられ、導かれて行くという聖書が示す素晴らしい真理に生かされて行くことができるのです。